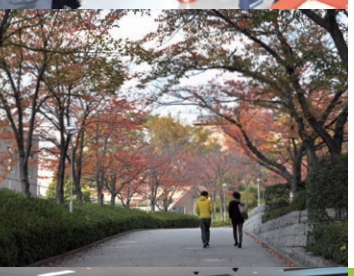
THINK × ACT
KANSAI
UNIVERSITY

CTL
Kansai University Center for Teaching and Learning
Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

December 2012
vol.10



授業に参加する意義を高めましょう

教育推進部長（副学長） 林　宏昭

2012年10月から、教育推進部長を拝命した経済学部の林です。

教育推進部の取組みの一つに、FD活動があります。講義やゼミの効果が少しでも高められるように、さまざまな手法を検討しています。しかし、授業の改善の主体はあくまでも担当者と受講生です。

ここで少し、教員の授業への取組みについて考えてみたいと思います。私の恩師が生前に書かれたものの中で、“「試験さえできれば、講義に出たくなければ出なくても良い」というメッセージを学生に対して送ってはいないか”と指摘されていました。これについて、実は思い当たる節があります。

私の専門は財政学という分野で、政府支出や税のことを講義で話します。学生も将来は納税者となり、政府支出や税金のあり方を考える力を身につけて欲しいという思いで講義をしています。したがって、教科書や専門書を用いて、様々な考え方を理解してもらうことでも良いのではないかとも思えます。知識を問う試験問題でなければ、本を読むことである程度の答案は書けるでしょう。

しかし、大学で学ぶということは、授業に出席して何を得るかが基本です。そのためには、教員はさまざまな形で授業に参加することのメリットを示さなければなりません。授業に参加することで、知的好奇心が満たされるということもあるでしょうし、授業を受ける前と比べれば考え方の視界が広がったということもあるでしょう。そのようなメリットを示すうえで、教員はなにができるのか、何をしなければいけないのかを考えなければなりません。授業における受講生の反応（少なくとも、わかったのか、わからないのか）や、授業の後の質問は、教員が何をしなければいけないのかを知る大きなヒントになります。学生の皆さんも、授業に座っているのではなく参加して、教員が考える手助けをしてください。

フォーラム・セミナー報告

第7回 FDフォーラムを開催しました

日時：6月23日(土)13：00〜14：30
場所：第2学舎2号館　C303教室

大学教育における学生自身の持つ「教育」力の1つとして、ティーチング・アシスタント（以下TAとする）の活用が本学でも行われている。これまで、学部独自のTAの運用に加え、「試行的TA制度」が2005年度より発足しCTLが主体となって全学的に運用されてきた。それを、本格的なものにすべくCTL内部でワーキンググループを立ち上げ検討を進める中、時宜を得て、この領域で先進的な研究・実践をされている日本大学の北野秋男教授に「大学教育の質的向上を目指して−TA・SA制度の有効活用−」と題する講演をいただくことができた。

北野教授による講演の様子

北野教授は早くからアメリカにおけるTA制度の研究、日本全国の大学のTA運用について訪問調査等をされており（その成果は編著書『日本のティーチング・アシスタント制度―大学教育の改善と人的資源の活用（東信堂）』に結実）、当日も豊富なデータをもとに有益なお話をいただいた。

まずは、大学教育そのものが質的に改善されていくことの必要性、高等教育の今日の在り方を概観され、豊富なデータを背景に日本のTA制度の現状を詳説いただいた。その後、ご所属の日本大学文理学部におけるTA制度のポイントを、ステューデント・アシスタント（以下SAとする）の活用も絡めて説明された。ここでは詳細な「規程」等の紹介もあり、きわめて実践的な内容であった。さらにTA/SAを使った授業モデルの紹介をいただき、実際に授業の中で活用する際の問題点なども指摘いただいた。

本学の「学生の教育力活用」制度の構築に向けて力強くエールをいただき、大変実り多い講演会を締めくくった。

（教育開発支援センター長　田中俊也）

第8回 FDフォーラムを開催しました

日時：11月7日(水)16：20〜17：50
場所：第2学舎2号館　C507教室

11月7日（水）、東京工芸大学芸術学部教授の大島武先生を講師としてお招きし、『コミュニケーション再考−分かりやすい「伝え方」−』という演目で講演していただきました。コミュニケーションやプレゼンテーションなどのパフォーマンス研究をご専門とされ、ベスト・エデュケーター・オブ・ザ・イヤー最優秀賞を受賞された経験のある氏ならではの軽妙な語り口で、教職員と学生とが相半ばする独特の編成の聴衆を1時間半飽かすことなく、重要なポイントが自然に胸に落ちるお話をされました。その素晴らしいお話を文字で再現するのには限りがありますが、ここに要点をまとめておきます。

その一。コミュニケーションは誤解の連続であることを正しく認識しておくこと。コミュニケーションとは、即ち「記号」のやりとりなので、その意味づけ、解釈に幅や差異があるのは自然なことと捉え、そのズレを可能な限り軽減するように心を配る必要がある、ということです。

その二。わかりやすく話すこと。大島氏はC.キャブリスの「錯覚の科学」や久垣啓一の「図に描けない話はするな」を引用しながら、わかりやすく話すための八箇条とプレゼンテーションマインドの重要性についてお話されました。八箇条とは、①大枠から話す、②具体的に話す、③話を構造化する、④自信を持って言い切る、⑤相手の反応に合わせゆっくり話す、⑥相手の土壌に立って話す、⑦相手に馴染みのない言葉は使わない、⑧タイムマネジメントを常に意識する、です。教育職員にも事務職員にも、そして学生にとっても大切なことであり、実践を目指すべきだ、目指したいと思われる内容でした。

その三。コミュニケーション上手になるために必要なポイントをおさえておくこと。コミュニケーションを豊かに、潤滑に展開するためには話す力（表現する力）だけではなく、聞く力も必要です。コミュニケーションの相手に自分が話を真剣に聞いていることを伝え、話の内容への賛同の可否にかかわらず受容する意思・姿勢のあることも伝え、メッセージを交換する頻度を高めることが重要であり、非言語コミュニケーションをも十分に駆使する必要があるとの指摘は誰もが首肯できることでした。

94名の参加者のうち、54名がアンケートにお答えいただきました。その一部を紹介します。講演会に参加した理由で最も多かったのは「テーマに関心があったから」で、96.3%を占めていました。テーマの設定が適切であったと言えるでしょう。講演内容が役に立ったか否かについては、「大いになった」が87.0%、「少しなった」が13.0%であり、役に立たなかったという評価は皆無でした。この数値からも内容が素晴らしかったことをうかがい知ることができると思います。

教育開発支援センターでは以後もみなさまが関心をお持ちのテーマで講演会を開催していきたいと考えております。ご要望等があれば、是非ともセンターまでご連絡くださいますようお願い申し上げます。

（教育推進部　三浦真琴）

大島教授による講演の様子

ランチョンセミナーの新シリーズが始まりました

教育開発支援センター主催のランチョンセミナーでは、第7回から11回までの5回に亘る新シリーズを始めました。題して『グループワークをはじめませんか?』です。既に授業でグループワークを導入されている方も、これからグループワークを授業に採り入れることを検討されている方も、お気軽にご参加いただき、知見やアイデアを共有したいと考えています。

ご存知のようにグループワークは授業を効果的に展開するための手法の一つです。この手法のアドバンテージをご理解あるいは再確認していただくために、便宜上、この手法に特有の、あるいは顕著なファクターをいくつか抽出しては、それについて説明をしたり、実践例を紹介したりするというスタイルでセミナーをすすめることになります。とはいえ、実際の授業は各種要素が自然に融合するかたちで進行するものである―授業が生物（なまもの・いきもの）である―ことを等閑視するわけではありません。あくまでも“便宜上”、そのような展開になることをご理解賜れれば幸甚に存じます。

新シリーズ第1回目（10月5日開催：通算第7回目）は『グループワークへの“助走”』と称して、グループワークを始める前の準備作業について話題を提供いたしました。グループワークを効果的にすすめるためには4〜5人ぐらいのサイズが適切であるとされています。初めてグループワークを導入される場合には参考にされてもよいでしょうが、この数字を金科玉条とする必要はありません。グループワークの内容や受講生の属性などに応じて、適宜、サイズを決めればよいでしょう。

グループサイズもさることながらグループをつくる際に受講生を適切に配分することには十分に留意した方がよいかもしれません。受講者名簿の順番にしたがって機械的に分けるよりは、学部・学科・学年・性別あるいは教師の担当する別の科目の履修の有無などを勘案し、偏りのないグループを作る方が望ましいでしょう。そのような編成をグループワークの実施に先だって準備しておくこと、これを授業前の仕込みとしてご案内申し上げました。この他に受講生がグループ編成のプロセスを実感・体験できる方法も紹介いたしました。

続く4回に亘るセミナーでは教室において留意すべきことや新しいアイデアならびに実践例をいくつかご紹介する予定です。既に終了した第2回目は『グループワークに向けて“HOP　STEP　JUMP”』（11月16日開催：通算第8回目）と題してアイスブレイクに関する提案をいたしました。アイスブレイクの方法は多種多様ですが、セミナーではもっともポピュラーな方法の一つ、自己紹介のやり方について提案いたしました。

自己紹介において留意すべきは、学生が話すのに困らない内容を項目として立ておくこと、他のグループメンバーが紹介した事柄が誰にとっても記憶しやすいものであること、そのようにとらえておけばよいでしょう。さらにその項目（の中の一つ）がグループにおけるfree dialogueのきっかけとなるようなものであれば、なおよいと考えられます。このような作業が、人為的につくられたグループをメンバーがチームへと育てていくためのプロセスの一つであると捉えると、より効果的な自己紹介やアイスブレイクの方法を編み出すことができるに違いありません。

残る3回は本学におけるグループワークの実践例を紹介する予定です。第3回目は『グループワークに向けて“HOP　STEP　JUMP”』（12月7日開催：通算第9回目）および第4回目『グループワークに向けて“HOP　STEP　JUMP”』（12月21日開催：通算第10回目）は化学生命工学部の片倉啓雄先生を講師としてお招きし、“World Cafe”をアレンジして、どの学生もが役割を遂行するように配慮された工夫などについてお話し戴きます。最終回（2013年1月11日開催予定）のタイトルは「グループワークのNEXT STAGEへ」です。長らくのグループワーク実践の蓄積をお持ちの商学部の長谷川伸先生を講師としてお招きします。これまでにご参加いただけなかった方も、どうぞ足をお運びくださいますよう、お願い申し上げます。

（教育推進部　三浦真琴）

Learning Assistant

LA活動報告

ラーニング・アシスタント（LA）がNorthern Arizona University（NAU）の学生と交流を行いました

6月15日に本学の協定校であるNAUの学生16名及び教員が本学を訪問しました。その際に行った歓迎行事の一環として、本学LAがNAUの学生・教員と交流しました。

各グループのディスカッションの成果をプレゼンで共有

フォーラム「日米の高等教育について考える」では、LAが日本の大学生の日常生活について英語でプレゼンテーションを行ったり、「クリッカー」を用いて日米の学生生活・文化の違いを確認し合ったりしました。

LAは普段の授業で培ったプレゼンテーション、グループディスカッション、ファシリテーション等の能力を如何なく発揮し、文化の多様性についての議論とお互いの交流をより深めるきっかけづくりに寄与しました。以下、一部ではありますが、交流に参加したLAの声を掲載します。

（教育推進部　山本敏幸）

関大生の1日の過ごし方をLA（東城さん）がプレゼン

参加したLAの声

6月15日のフォーラムでは、NAUの学生の積極的で型にはまらないコミュニケーションスタイルを間近で見ることができました。理解するまで質問を投げかける活発な姿勢は見習うべきだと思います。また、伝えたいけど言葉が出てこないという場面があり、英語の必要性を改めて感じました。それでも当日は、フレンドリーなNAUの学生や通訳をしてくれた学生に助けられ、有意義な時間を過ごすことができました。

（商学部4回生）

教育開発支援センターからのお知らせ

平成24年度「私立大学教育研究活性化設備整備事業」に<「考動力」を育む学習環境「コラボレーションコモンズ」の構築>が採択されました

授業外の学習を支える学習環境の必要性を、6月発行のvol.09のニュースレターで記載しました。そのすぐ後、文部科学省から私立大学教育研究活性化設備整備事業の公募が出ました。提出締切まで1ヶ月ほどでしたが、教育推進部は凜風館1Fの学生ラウンジをコラボレーションコモンズとして開設する案で申請をしました。そして、10月末に採択が決まりました。タイトルは、「考動力」を育む学習環境「コラボレーションコモンズの構築（事業推進責任者　岩﨑千晶）」です。コラボレーションコモンズには、これまで本学が採択された「広がれ！学生自立型ピア・コミュニティ～関西大学で育む21世紀型学生気質～」、「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」といった教育GPやボランティアセンターなど本学独自の取り組みを集結させ、学生同士のコラボレーションを誘発し、学生の考動力を育成することを目指しています。コラボレーションコモンズには、専門エリアとして、グローバルエリア、ライティングエリアを設けます。これらのエリアには、学生スタッフを配置します。またピアエリア、ボランティアエリア、ラーニングエリア、ICTエリア、コラボレーションエリア、コモンズラウンジを設けます。授業だけではなく、課外活動においても積極的に活用していただければと思います。現在、来年4月の開設を目指して準備を進めています。詳しくは次号にて紹介させていただきます。

（教育推進部　岩﨑千晶）

TAの経験を活かしたTAハンドブックを作成します

学生の教育力活用プロジェクトでは、これまでTA研修を実施してまいりました。TA研修では、TA同志が自らの活動をふりかえり、活動で困ったことや、課題をどう解決してきたのかを共有してきました。こうした研修を通じて、TAの知見を新たにTAとして活躍する後輩に継承して行く必要性があると考えました。そこで、TA経験が長く、協力をいただけた樋口隆太郎さん、松尾悠さん、アドバイザリースタッフの遠海友紀さんと学生の教育力活用プロジェクトのスタッフで、TAが抱えている課題とそれに対する解決策を紹介するTAハンドブックを作成することになりました。ハンドブックではこのほかにも、TA活動の目的、TAの役割、規程等も記載します。来年度のTA研修の際に配付する予定です。ご期待ください。

（教育推進部　岩﨑千晶）

From CTL事務局

関西大学が持っている最大のリソースとは何だろうか。キャンパス、財政、教職員、卒業生。確かにこれらは全て重要なリソースではある。しかし、本学にとって最大のリソースは「学生」ではないだろうか。一人ひとりの学生が持っている無限とも言える可能性は大学にとって貴重な資源である。現状を大きく変えうる独創的なアイデアや発想、他者との協調・連携によって生まれるパワフルな発揮能力等々、数え上げればきりがない。

このようなポテンシャルを持つ学生たちが、キャンパスの中で営まれる様々な教育活動の現場においてその力を発揮し、活躍している姿を見ることが多くなっている。CTLが関わる教育の現場に限定してみても、TA、SA、LAとして学生たちが授業改善の重要な実践者として活躍している。さらに教育推進部にまで範囲を広げて俯瞰してみると、障がいを持った学生への修学支援を行うサポーターの学生たち、全学共通教育における科目提案学生委員の学生たちの活躍にも目を見張るものがある。

従来、教育の改善はFDの言葉に表わされるように、教員の自発的な研鑽と弛まない努力によって実現されうるものと認識されてきた。しかし、教育改善の実現を教える側にのみ求めるのではなく、教育を享受する学生にも大いに改善に向けた取り組みに参画してもらうことを目指すべきと考える。また、本学の学生たちはそれが十分にできる意欲と能力を持っていると確信する。

（良）

THINK × ACT 関西大学 KANSAI UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching and Learning
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35　TEL: 06-6368-1513　FAX: 06-6368-1514
http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html

発行日／2012年12月21日　編集・発行／関西大学教育開発支援センター